

Title	社会学の中心と辺境：家族社会学と教育社会学
Sub Title	
Author	渡辺, 秀樹(Watanabe, Hideki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	1996
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.1 (1996. ),p.14- 15
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集: 社会学はいま、何をなすべきか
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0014">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-19960000-0014</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 社会学の中心と辺境 —家族社会学と教育社会学—

渡辺 秀樹

### 1. 教育社会学の辺境性

特集のテーマに一般的に答える準備がないので、私自身が関わってきた社会学の下位領域である教育社会学と家族社会学を念頭におきながら、とくに家族社会学はいま、何をなすべきか、自戒および自己反省を込めて、述べさせていたきたい。

教育社会学者の天野郁夫氏は、教育社会学紀要『教育社会学研究』第47集（1990）に、「辺境性と境界人性」という短文を寄稿している（これは、最近刊の『日本の教育システム』のあとがきに再録された）。彼によれば、教育社会学はかつて、そして今も辺境にあるという。教育社会学は、教育学の辺境にあり、同時に社会学の中心からも遠い。教育社会学会において、教育社会学とは何かを問い、そのアイデンティティを問う作業が頻繁に繰り返されたのも、この辺境性に起因している。上述の短文も、『教育社会学の批判的検討』という特集に載ったものである。

天野氏は辺境にある境界人のポジティブな面に注目する。すなわち、辺境にあるがゆえに持つアンビヴァレンスやコンプレックスを抱えつつ、中心からの自由がもたらす革新性や創造性を境界人は持ちうる、とする。そして、教育学や社会学の中心に向けてフロンティアを創出していく、という戦略が教育社会学が、独自の研究領域として確立するためにとらざるをえなかった、そしてとってきたものではなかったか、と述べている。

日本の教育社会学が、他の社会学の領域と較べて、近年、活気に満ち、生産性に富んでいると評価するのは、私だけではないだろう。その魅力的な研究領域として発展してきた理由の大きな要因として、この辺境性・境界人性があったと考えられないだろうか。常に自己を相対化し、反省するしかなかったのである。

### 2. 家族社会学の中心性

他方、家族社会学は、日本の社会学の常に中心にあった。戦前からの重厚な研究蓄積をわれわれはすぐに思い浮かべることができる。それらは、家族社会学のみならず、社会学全体の発展に貢献し、その発展の様相を規定しさえした。この中心性が、家族社会学の現在の問題と大いに関わっていると考えることはできないだろうか、というのがこの小論の問題意識である。家族に関する議論は沸騰している。しかし、家族社会学は（とりあえず私自身も参加している家族社会学会に限定する）、はたして活気に満ちているだろうか。残念ながら、自信を持って肯定する研究者は多くはないだろう。

家族とは何か、という定義論は繰り返し議論の俎上にのぼる。ところが奇妙なことに、家族社会学とは何か、というこの学問自体に対する問いかけが家族社会学会のなかで、取り上げられることは少なかった（91年の学会設立記念の大会のみが関連テーマを掲げている）。このことは、家族社会学が学会というかたちで活動をはじめて、まだ10年に満たない、ということとも関係している。家族そのものが揺さぶられていると同様、家族社会学のアイデンティティも、激しく揺さぶられていることを自覚しなければならないはずだ。〈家族社会学の社会学〉が必要なのだが、学会がなければ、それぞれの研究者が家族という自明の前提に立って個別的なテーマを掘り進める以外にない。社会学の下位領域の学会として、学問の領域として自己反省する場が無かったのだ。あるいは、その必要性を感じなかったのだ、ともいえる。

### 3. 中心から境界へ

家族社会学が社会学の中心領域として、多くの業績をあげてきたことは疑いもないことだが、しかし、そのことの潜在的な帰結として、学問的（知識社会的）反省をややもすれば軽んずることはなかったであろうか。『家族』の（あるいは『パラダイム』の）存在の自明性の上に学問的営みを積み重ねてきた、ということはないだろうか。

中心は、確固とした固定的なアイデンティティに固執しやすい。しかし、社会は、そして家族は、激しい変動の渦中にあり、揺れ動いている。中心が空洞化し、辺境が活性化している、とも表現できる現実がある。家族についての興味深い議論が、家族社会学会の外＝辺境で見られることも、これまで多かった。現実の家族の揺れに敏感に反応したのは、家族社会学のアイデンティティや家族社会学のパラダイムから自由な”非”家族社会学者であったとしても不思議ではない。彼らは必ずしも家族社会学会に入会しないのだが、このことの意味を真剣に考えなければならないだろう。

家族社会学に必要なことは、中心的なアイデンティティに固着するのではなく、新たなフロンティアを求めて境界に向かうことであろう。家族社会学自体を、中心ではなく境界領域に置くことで、学としての自省能力を高めること。マージナル・マンとしての緊張感のなかで、引き裂かれた自己＝引き裂かれたアイデンティティに耐え、相対的で複合的な視線を持ち、変化に対応的な革新性と創造性を獲得していくことではないだろうか。

1995年秋の家族社会学会大会のシンポジウム・テーマは『家族社会学の新しい地平』であった。私はその司会を担当したが（『家族社会学研究』第8号参照）、シンポジウムが成功したか否かはともかく、学会として、アイデンティティを模索しようとする機運が高まってきたのだと捉えたい。家族社会学が重要な転換期をむかえているのは確かなことだ。

（わたなべ ひでき 慶應義塾大学文学部）